

* 挨拶

戸田市教育委員会 教育長
戸ヶ崎 勤



令和元年度戸田市立教育センター教科等研究グループ（教育センター研究員）等による研究の成果がまとまりましたので、ここに「戸田市教育研究集録」として刊行いたします。

今年度は、136名の教育センター研究員の皆様に、資質・能力の育成と学びの質を高める授業を目指し、自主的かつ積極的な研究に取り組んでいただきました。

最先端技術を活用した教育の在り方やICTのマストアイテム化に向けた動きなどが多く示されたこの一年間、Society5.0の時代の主役となる子

供たちの学びの場、学び方は日々大きく変化しています。本市では、未来社会で活躍する子供たちにとって必要な力を育成すべく、PEERカリキュラムに続き、『SEEPプログラム(Subject, EdTech, EBPM, PBL)』を進めております。本研究集録も、その4つのカテゴリーを柱に構成いたしました。SEEPとは、浸透するという意味です。今後、SEEPプログラムが市内全小中学校に浸透し、先生方の授業改善がさらに加速していくことを願っております。

結びに、真摯に研究を進められた先生方に対し敬意を表すとともに、多くの先生方が教科等の研究や新しい学びをはじめとする学校の取組の推進役となっていただくことをお願い申し上げ、挨拶といたします。

埼玉県学力・学習状況 調査分析から



慶應義塾大学 総合政策学部
教授 中室 牧子氏

子供が受験するとき、少しでも偏差値が高い学校に合格してほしいと願う親は多い。学力が高い同級生に囲まれていると、同級生の影響を受けて自分の子供の学力も上がると期待するからだろう。インターネットを検索しても「優秀な友達から刺激を受けられる」「優秀な友達は一生の財産」といった意見がある。

学校でも、とかく友達同士の関係というものには影響が大きいと感じている教師は多いのではないかと。経済学では、友達など身近な人が個人の考え方、習慣や行動に及ぼす影響を「ピア効果」と呼び、研究の蓄積がある。喫煙、飲酒、肥満、キャリア選択、貯蓄からゴルフの成績に至るまで、ピア効果の存在を証明した研究は多い。少しでも偏差値が高い学校を望むのは合理的なように見えるが、この判断には強い前提がある

ので注意が必要だ。それは、優れた友達から受ける影響は「良い」影響であるという前提だ。かつては、そうした結果を示す研究が大勢だったが、最近の研究では、優れた友達から「良い」影響を受けるかどうか、意見が分かれている。

米フロリダ州の生徒を6年間追跡した、ボストン連邦準備銀行エコノミストのメアリー・バーク氏と、フロリダ州立大学のティム・サス教授による論文は有名だ。もともとの学力がクラスの上位20%の生徒は、同じクラスに自分と同様に学力が高い生徒がいると学力が向上する。一方、もともとの学力が下位20%の生徒は、上位20%の生徒がいると、むしろ学力が下がってしまった。優れた友達から受ける影響が良い影響かどうかは、もともとの生徒の学力に依存することを示唆している。

もともと学力の低い生徒が、学力が高い同級生と交流すると学力が下がってしまうのはなぜか。この問題を考えるうえで、学校内やクラス内の「成績順位」に着目した最新の研究が続々と発表されている。学習塾で模試の成績順位が廊下に貼り出されたり、学校での習熟度別学級で成績が上のクラスと下のクラスに分かれたりすることで、子供たちが塾内や学校内での自分の成績順位を意識する場面は数多くあるだろう。順位に着目した研究の背後にあるアイデアは、同程度の学力だが、学校やクラス内の順位が異なる生徒を比較するというものである。

状況を整理するために、次のような場면을想像してみしてほしい。同じ戸田市内の近くの小学校に通うAさんとBさんがいたとする。AさんとBさんは、埼玉県学力・学習状況調査で80点の実力の生徒である。しかし、二人が通う小学校の埼玉県学力・学習状況調査の平均点はAさんの学校のほうが高い。AさんとBさんは同じように80点を取れる実力なのだが、Aさんは学校内の順位が100人中70位で下位なのに、Bさんは100人中20位で上位に位置している。こうした状況の下で、中学校で成績が良くなったり、順位が高くなったりするのはAさんとBさんのどちらだろうか。多く人は、「学力の高い小学校に通っているAさんのほうが、周囲の優れた友達から良い影響をうけて、中学校で有利になるだろう」と考えるのではないだろうか。だからこそ、私たちは、わが子に「少しでも偏差値の高い学校に合格してほしい」と願うのだろう。

私たちが埼玉県学力・学習状況調査のデータを用いて推定してみると、成績順位についての研究の結果は一貫している。中学校で成績が良くなり、順位が上がっていく

のはBさんである。AさんもBさんも同じ程度の学力なのに、である。「鶏口となるも牛後となるなかれ」とはよく言ったものではないか。なお、米国のデータを用いた研究は、高校での成績順位が10%上昇すると、大学進学率が1.4ポイント上昇するということが示されており、別の研究では小学校4年生の時の成績順位が30歳代になってからの賃金に影響しているという研究もある。どうして順位がそこまで重要なのか。海外の研究では、自分自身の順位が高いと認知すると、「自分の能力に自信を持ち、勉強への意欲が高まる。精神面でのストレスも減り、将来に明るい見通しを持つようになる」と指摘している。この研究では学校内やクラス内の順位が上がっても、親や教師の行動は変化しないことも明らかにし、生徒自身が「自分をどう評価するか」がポイントだと結論付けている。ちなみに、埼玉県学力・学習状況調査のデータを用いた研究も同様である。学校内やクラス内の順位が変わっても、親や教師の行動は変化していない。しかし、子供本人の自己効力感は大きく変化し、そして学習方略の中の「努力調整方略」に著しい変化が生じているのだ。

他人との相対的な順位によらず、努力をする子供に育てることが重要だが、そのために私たちができることは何か。今年度も戸田市では、埼玉県学力・学習状況調査のデータをもとに、子供の学力を特に伸ばした戸田市内の小中学校で31名の教師にインタビューをしている。インタビューの結果からは、日頃の授業等の中で、努力の過程を可視化することに注力していることがわかる。カードや学習シールを使って、目標達成までの過程を視覚化し、どのくらい努力をすればどのくらいのこと達成できているのかを知ることにつなげているという。参考になる取り組みではないかと思う。